

則天武后の巡幸路也。武后はわたしの祖先の吳国公（李孝逸）の才能を見出された方だ。利用したのを捨てられたのではあるけれども。吳国公は徐敬業の乱を討って大功があった。武后の親族の武承嗣らに嫉まれ、反逆者の名を負って、海南島に流され、そこでなくなった。それから数年たつて、武后は国号を周と改め、みすから天子の位についた。その聖曆二年（六九九）春二月、嵩山に行幸し、仙人王子晋の廟をとい、その仙人の昇天したという緱山に行幸した。女帝の恋人を王子晋になぞらえてのランデヴウだったのさ。同じ年の十月、女帝は福昌縣に行幸した。何が目的だったのか、これは、わたしは知らない。余談ながらそれから三年のちの長安二年（七〇三）日本という東海の島国から使いが来た。国主を文武天皇という。その先代は持統という女帝で、当時上皇だった。すぐれた詩人だと聞いた。

芭蕉「山を歩いていゝのに、今日はすいぶん尊いご婦人にかかりがありますね」

26 神娥戀花妻△

花むらに女神あませり

賞

27 菅繁發淵磯

淵の小石まとふわたこけ

女神の山だ、ふしぎはない。げんに、ほら、お前のうしろの花むらに女神が立っていらっしやるじゃないか。

芭蕉「ああびっくりした。おどかさないでください。ほんとうのところ、わたしは気が小さい

のですからね」

なにもそう驚くことはない。神女は罪のない人に禍を与えたりはなさらぬ。山と川とが交わる  
ところは、神女がさまよう場所なのだ。魏の曹植に「洛神賦」という有名な文章がある。文帝の  
黄初三年へ二二二）かれが洛陽の都に参朝し、その帰りみちに洛水のほとりて宓妃という神女に  
逢った。宋玉の「神女賦」になぞらえて作ったという。

わたしは都から、東の領地に帰ろうとして、伊闕山を背にし、轅轅坂をこえ、通谷をわたり、  
崑山にさしかかった。日はもう西に傾き、車はきしみ馬は疲れている。そこで車を杜蘅の花  
さく沢べに解き、芝草のしげる田で馬にまぐさをあたえ、陽林をさまよい洛水をながめた。  
すると気持もかわり思いははれはれしてくる。見おろして何もみえぬ。見あげるとなんと、  
ひとりの美しい女性が霧のほとりにいるではないか。で、御者をよんでいった。「お前にはあ  
の人が見えるか。こんなに艶なあの人は何者だろう」と面首がいう。「洛水の神を宓妃というの  
だそうですが、では職さまのごらんになったのはそれではありませんか。どんな様子ですか  
お聞かせください」とわたし「その形は飛びたつ鴻のようにふわりと、天に升る竜のように  
くわくわくと、秋の菊のようにかがやかく、春の松のようにはんなりと、薄雲をまとった月  
のようにおほめき、風にまう雪のようにひらひらと、遠くから望むと朝やけのなかをきらき  
ら昇る太陽、近づいて見れば緑の波からくつきりさき出る蓮の花、太からす細からず、長か  
らす短からず、すらりとした撫で肩、白絹を束ねたような脛、えりあしすつきりと、肌は

あくまで白い。おしろいつけず、紅もはいていないのだが。雪の髻はたかだかと、長い眉がうっとりうねる。丹のくちびるはうるわしく、しろい歯はあざやかに、あかるい瞳はすばやく動き、面頬にふかいえくぼ。姿はあてやかに、立ち居はしっとり。心やさしく、言葉あだめぎ。世にたぐいないすがた、絵にかいたようなかたち、きぬすれさやかな衣をき、けうめく録のおび玉をつけ、翡翠の羽をつけた金のかんざしをさし、明月の珠玉を体にまとい、天駆けるくつをはき、霧のもすそをひき、幽蘭のおうあたりひそみ、歩んでは山くまにたたずむ……

どうだね、こんな女神ならば、お前だ、て会いたいと思うだろう。曹植が女神に会ったという景山はず、と東にあたるが、女神は洛水の神。このあたりも同じ川辺だから、会って不思議はない。神女は明月珠をまと、ていたが、みろ、谷間の小石がわたごけをまとっている。お前に似合の相手じゃないか。

1973.1.5.

八 雑記 55 V 銅 鼓

1973.2.1.

「黄家洞」2089(20735)は、広西の「黄洞蠻」とよばれた少数民族の、唐の官軍に対する抵抗を詠じた作だ。これについては拙稿「楞伽」で考文をのべた。詩中に「紫帽三點銅鼓鳴」の句があり、その銅鼓はどんなものだろうと思っていたら、清の錢泳の『履園叢話』巻二に、

銅鼓形如坐墩。中空無底。扣之有聲。面圓而多花紋。其上隆起。有四耳。作蛙鵝之狀。無錫

造年月字樣、有徑二尺余者、亦大小不等、余生平所見、不下三四十枚、惟晉陵趙詠北先生家所藏一枚為最大、今雲南、四川、廣東俱有之、國初秋谷有銅鼓歌、朱竹垞有銅鼓考、讀皆出自諸葛孔明所說、其實非也、後漢書馬援傳、於交趾得勝越銅鼓、援取其鼓、以饋銅馬、是在孔明之前、晉書食貨志、廣州夷人、室貢銅鼓、又載記云、赫連勃勃鑄銅為大鼓、以饋金鈔之、又在孔明之後、惟嶺表錄異云、蠻夷之祭、有鼓焉、新唐書云、蠻人訟聚、則擊銅鼓、則銅鼓者、實苗蠻之所造、非孔明也、

と記す、これはおもしろい、まもなく宋の范成大の『桂海虞衡志』(『學海類編』所收)にも、銅鼓、古蠻人所用、南邊土中、時有屈得者、相伝為馬伏波所遺、其製如坐墩、而空其下、滿鼓皆細花紋、極工緻、四角有小蟻餘、西人罕行、以手拊之、声全似鼓、とあるのを知つた、清の屈大均の『廣東新語』卷七「馬人」の条に、

馬人、一曰馬苗、俞益期云、壽冷寧苗、有馬文淵遺兵家、對銅柱而居、悉姓馬、考曰馬苗、凡二百余戶、自相婚姻、張勅云、象林縣在交趾南、馬援所植西銅柱以表漢畷也、援北麓、苗十餘戶於銅柱所、至隋、三百余戶、悉姓馬、土人以爲流寓、呼曰馬流人、銅柱罷沒、馬流人常識其處、常自稱大漢子孫、云、其地有掘得文淵所製銅鼓、如坐墊而空其下、西人罕之、有聲如擊鼓、馬流人常扣擊、以享其祖、祖即文淵也、……馬人今已零落、而欽州之嶺長苗姓、其祖曰黃万定者、青州人、初從馬援、証交趾有功、苗守辺境、後子孫分守七峒、……然黃氏尊盛而馬氏衰、亦獨何歟、

これらの記事にいう銅壺は、みな同系のものらしく感ぜられる。在氏の記事にみえる鄭氏と賀の詩にいう詩家ともかわりがあり、そのうな気がする。

△雑記・56V 「金刊本」

1973.3.23.

「書目季刊」第四巻第四期（一九七〇・夏）に「跋所謂金刊本李賀歌詩編」という文を鄭襄と  
いう人が書いているのを知り、本壺さんに取りよせてもらって、読んだ。

四部叢刊初集に収める「李賀歌詩編」を金刊本といひならわしているが、この本の刊時は蒙古の憲宗六年（一二五六）。金が亡んで二十二年、蒙古がまた元と称しないときだから「蒙古刊本」とよぶべきだ、というのがその趣旨である。

△はじめてそのことを指摘したのは王国維で、觀堂別集卷三「蒙古刊李賀歌詩編跋」にみえる。ただわたしは王先生のこの文章を読む以前に、この本を蒙古本だと断定していた。……わたしの結論は王先生と同じだが、用いた資料と、考証方法、過程は一樣ではないから。……王氏の文の補充と注釈とするVと鄭氏はことわっている。王氏の文を読むと、わたしもかたしてこれを讀んだような気がするが、鄭氏の文を読むまで、すっかり忘れていた。左に鄭氏の引く王氏の全文と、鄭氏の按語をうつす。按語は双注として王氏の文中に挿入されているが、ここでは別出する。

案：趙衍跋題内長者，蒙古憲宗六年，雙溪中書省郎律丞相鑄也。蓋蒙古刊本，非刊本也。又案：元史郎律希亮傳：憲宗嘗遣鑄銀於燕，鑄曰：「臣先世監鑄銀，鑄生僕在中土；

願携詣子至燕受業。』憲宗從之。乃命希亮師事北平趙衍。時方九歲。丙辰。憲宗召錄遺和林。希亮獨留燕。』<sup>①</sup>此本趙衍跋中述雙溪中書君出所藏舊本。全與希亮傳年月相合。是此本爲蒙古憲宗丙辰所刊無疑矣。

同義門跋以龍山爲劉致君號；非也。秋淵集<sup>②</sup>西岩趙君文集云：「西岩崛起賦畝，從龍山呂先生學。」又云：「虎岩、龍山二公。挺英逸不凡之材。挾邁往凌雲之氣。雅爲中書令耶律公賓。至今其子雙溪從之問學。由是趙李之學自爲燕趙一派。」玉堂嘉話一記「西遊嘗談：趙晉臣能以詩鳴燕朔間，二人皆出耶律相門下。虎岩每得一聯一詠。卽提擲其帽於几。龍山從旁謂曰：「不知李杜平時費多少帽子？」聞者爲捧腹。」是龍山乃呂凱字；劉致君輩行較高，不得至蒙古時尚在也。乙丑夏五又記。<sup>③</sup>

- ① 竊按：依在元史卷一百八十，此所引多有刪節。  
② 四十三

③ 竊按：玉堂嘉話卷一即秋淵集卷九十三。「燕朔」原引誤作「燕趙」，「爲捧腹」引作「爲之捧腹」。今據秋淵集改定。「虎岩每得」原作「虎叢每得」，「於几」原作「於九」。皆排印之誤。

なお、鄭氏の左の「附記」も参考になるだろう。

袁克文（寒雲）跋宋宣城本李賀歌詩編云：「又有金刊袖珍本，有箋註，無集外詩。」他所謂的是吳正子註本，與本文所論並非一書；柳國立中央圖書館善本書目，其書是元刊本，不是金

わたしも今まで「金刊本」とよんできたが、これから「蒙古本」とよぶことにする。ついでにいうと、わたしが「元刊本」とよんでいる『錦囊集』を荒井健氏は明代の刊本ではないかと疑い、わたしも、そうかもしれないとおもふ。ただその論証がないので、しばらく引きつづき「元刊本」とよぶ。

▲雑記・57▽ 陸 澹 の 李 賀 評 (付 皇甫溟)

1973.4.5.

王琦は『李長吉歌詩』の首巻「詩評三十一則」の一条として、趙宦光の『彈雅』から次の文を抜いている。

あるひと陸放翁に問うていわく「李賀の樂府は古今の工を極む。具眼のひと、あるいはいまだこれを許さず。何ぞや」と。放翁いわく「賀の詞は、百家繁納の五色眩曜するがごとし。光は眼目を奪い、人をして敢て熟視せざらしむ。その、用を補うを求むれば、あるなきなり。予おもえらく、賀の詩の妙は興にあり。その次は韻の逸なるにあり。もしただその五色の眩曜を挙ぐるのみならば、これ兒童のヤ葆をも、てこれを目するなり。あにただに補うなきのみならんや」と。

わたしは、いちおう右のように訓んだが、あるいは「予おもえらく」以下は、陸氏のことではなく、趙氏のことばかりかもしれない。「彈雅」をじかに読みたいのだが、それができない。

「予おもえらく」以下が趙氏のことばならば、陸氏は、李賀の詩をくさしていることになる。

「ここにきて書いてきて、ふと気づいて、宋の范曄文の『対林夜語』をみたら、陸游の同じことばがのせてあり、それによると「予おもえらく」以下は、趙氏のことばらしい。『対林夜語』では陸氏のことばのあとに「杜牧之謂猶加以理、奴僕命豈可也。豈亦惜其詞勝、若金銅仙人辭漢一歌亦傑作也。然以質視温庭筠輩。則不侔矣。」とある。これがまた陸氏のことばのようでもあり、范氏のことばのようでもある。たぶん、范氏なのであろう。

陸氏のことばは、以後、よく引き合いに出され、ことに李賀をくさすときに利用される。それらの文脈の中で読みなれると、陸氏が李賀を軽んじていたようにも感ぜられてくる。

陸氏の『渭南文集』(四部叢刊、明治宇本)巻十四、「趙秘閣文集序」にいう。

漢の孝武帝は文を好み、淮南王安は高帝の孫をもつて諸侯王たり。しかも学問文辞は漢在諸儒甲之中にあり。その著すところの大小山は、雅頌、離騷と並ぶにいたる。魏の陳思王、唐の太白、長吉は、則ちまた、帝子および諸王孫をもつて、落筆は古今に妙に、百世に冠冕たり……

「ここでは、帝子・諸王孫という特殊性でくくつての上ではあるにしても、李賀を、曹植・李白と併称しているのだ。賀を軽んずる人が、こんな書き方をするはずがない。

陸氏がこの序を書いたのは、慶元六年(一一三〇)の三月丁巳、七十六歳のときである。没年にはなお十年あるから、老衰して頭がぼけていたのではともいえない。范氏をつたえたものは陸氏の直接のことばではない。「趙秘閣文集序」は、みずから書いて署名したものだ。陸氏の李賀評を

とるなら、まずこれをとらねばならぬだろう。これを一つの基準にして、范氏の伝える陸氏のことはを検討しなおす必要があるろう。もともと、陸氏のことはが陸氏のものでなかつたところ、それが宋代のたれかのことばであることには違ひはなく、それ自体が一つの李詩評であることをさまたげはしない。

『渭南文集』卷三十九「何君墓表」にいう。

詩あに言い易からんや。一書も見ず、一物も識らず、一理も窮めず、みな憾あり。此の世を同じくして、盛衰異り、此の人を同じくして、壯老殊る。一卷の詩に淳漓あり、一篇の詩に垂病あり。一聯一句に至るまで玩すべきものあり、疵とすべきものあり。一讀、再読、十百読に至り、すなわちその妙を見るものあり。初は人意を悦可せしめ、これを熟味すれば人をして不満ならしむるものあり。大抵、詩は工ならんことを欲す。しかれども工もまた詩の極にあらざるなり。鍛煉の久しき、すなわち本指を失い、剗削の甚しき、かえて正氣を傷つく。名は幸得へまぐれて得られる、すべからずといふといえども、名をもつて詩を求むるは、また詩を知る者にあらず。鐵鑿はもつて人を移すに足り、考大はもつて衆を蓋うに足る。故に論久しくして後に公に、名久しくして後に定まる。ああかたかな、予けもとより、この道を知る者となすに足らざれども、またその意を致すこと久し。顧みて毎に敢て品藻を易くせず。けだし彼は宏求し約取し、数十年の力を極め、僅かにそのいわる自う喜ぶものを得ても、て人に示す。しかるに我はすなわち一覽して尽さんと欲す。それ可ならんや。

「新判の甚しき、かえつてその正氣を傷つく」というところを發揮すれば、范氏・趙氏のひいた。陸氏の李賀評になりえないではない。

しかし「何君墓表」で陸氏の言おうとしているのは詩評のむづかしさであり、卒然とかた<sup>られ</sup>る印象批評のあてにならなからさ、ではないだろうか。

この文は關德二年（一二〇五）の作で陸氏は八十一歳。

話はずこし飛ぶが、李賀を見出してこれ世に推薦した人のひとりには皇甫湜がいる。その湜について「滄南文集」巻二十八「跋皇甫先生文集」にいう。

右の一詩、滄溪の中興頌の傍の石間にあり。持正の集中に詩なし。詩の世にあらわるるものはこの一篇のみ。しかれども、おのずからこれ傑作。近時、容齋隨筆にもまたこの詩を載するあり。すなわちいう「風格ことに采るべきなし」と。人の見るところ恐らくまさにかくのごとくならじ。あるいはこれ伝写の該のみ。慶元六年五月十七日。龜堂書。

この文の作時がさきに引いた「趙秘閣文集序」の作時と同じ年であることは注意してよい。文中に引く「容齋隨筆」の記事はつぎの通り。記事を収めるのは巻第八である。

皇甫湜、李翱は韓門の弟子たりと雖も、しかれどもみな詩をよくせず。滄溪の石間に湜の一詩あり。元結のためにして作る。その詞にいう「次山有文章、可慨只在碑、然長於指敘、約潔多餘態、心語適相應、出句多分外、於諸作者間、技較成一隊、中行雖富劇、粹美君可蓋、子昂感遇佳、未若君雅裁、退之全而神、上與千年對、李杜才海翻、高下非可繫、文於一氣間、

爲物莫與大、先王路不荒、豈不仰吾輩、石磬立衙衙、溪口揚素瀨、我思何人知、徒倚如有待」  
 二の詩を味わうに、すなわち唐ひとの文章を論ずるのみ。風格ことに采るべきなきなり。

『渭南文集』卷三十、「再跋皇甫先生文集後しにいう。

司空表聖の論詩にいうあり「愚かつて韓吏部の詩をみるに、その駉鶻の氣勢、雷を掀かげ電を  
 決し、天地の根を撐抉し、物状それ変じ、鼓舞してその呼吸に徇うを得ざるなり。その次は  
 皇甫祠部の文集外の所作もまた適逸となす。深密に意なきにあらず。けだし、あるいはいま  
 だ違あらざるのみ」と。これに拠れば、すなわち持正にはおのずから詩集の孤行するあり、  
 故に文集中に詩なし。作らざるにあらざるなり。正に張文昌集に一篇の文なきがごとし。李  
 習之の集に一篇の詩なきは、みなこれ詩・文おのおの集をなせるのみ。表聖はただちに持正  
 の詩をもつて退之に配す。これを知るといふべし。しかれどもなお「深密に違あらず」とい  
 う。篤論にあらざるなり。予これを読み、けだし、かさねて歎ずるのみ。開禧丁卯四月二十一  
 日 某再書。

丁卯は三年（一一七二）である。

陸氏の序跋を読むと、見聞のひろさとともに緻密さにも感歎することが多い。このひとが卒然  
 と人に問われて「陸氏」のような口調で李賀をけなしたとは、わたしにはどうも信じにくいので  
 ある。陸氏の詩文にくわしい人の意見をききたいものだ。

入雑記・58 V 読曲歌

1973.4.22

六朝末の無名氏の「読曲歌」八十九首の第一首は、

花釵芙蓉髻 雙鬢如浮雲 春風不知著 好來動羅裙

である。むかしこの詩をよんだとき、すぐ李賀の「詠懷二首」の第一首 1012(20656)の「彈琴看文君 春風吹髮影」の句を想起した。

賀が六朝の詩をよく読んでいたことは疑いない。ことに無名氏の「華山畿」や「読曲歌」を愛読したはずで、拙稿「愷公」には、ややそのことに触れている。

さきあげた一首はなかなかうまいが、賀の句となると、とびぬけてすぐれ、ならべあげると「読曲歌」が気の毒になる。賀の句を見たときに鬢のほつれの風にふきみだれるイメージがとび出すのだ。「読曲歌」の多くは女性の作であろう。花釵の一首はことに女性のものなのである。女性のみる女性(自身をもふくめて)は、李賀のような男性の目がみるようにには即物的でなく、それがイメージの鮮烈さとかかわるのだろうか、とも考えるのだ。よくわからない。

▲雜記・59 V 清朝の遺老

1973.5.2.

「侯官陳石遺先生年譜」(陳声登編・王真統編・葉長青補訂)を読んでいたら「開蓬困敦、九歳」の条に

家中に韓冬郎の香奩集の注本、李長吉歌詩の鈔本、宋竹垞の鴛鴦譜歌あり。かつてひそかに取りてこれを吟誦す。

という記事をみつけた。

石道先生とは、清末民初の旧派詩人であり詩論家である。開途困致は同治三年（一八六四）である。李賀も早熟だったが、その詩を九歳で吟詠するとはいふんませた子だ。並べ上げてあるものから推すと、賀の集でも艶体ものを送んで読んだのだろう。かれの詩論の代表作『石道室詩話』巻一にしく沈増植へ字、子培への「寒雨積悶、雜書遺懷、裝積成篇、為石道居士一笑」詩に、

開天啓疆域 元和判州部 奇出日恆今 高攀不輸古 韓白劉柳嘉 郊島韓籍什

の句がみえる。陳衍の友人で、この期の旧派の詩宗といわれる陳三立の『散原精舍詩』にも、

二月十日還南昌西山上塚取城北馳道至下關待船作

向夕雲霞嫋嫋生 獨據酸淚出春城 連破叢竹高橋暗 十里垂楊大道晴 早晚樓船寒海氣 東

南形勝怒江聲 鄉心直與夜潮上 白石青松喻此情 卷上 葉七

があり、題貞を加えた句は賀の「金銅仙人辭漢歌」2059(2070)から

題歐陽淵生觀蔡文畫像

頤頤兀立七尺強 豐頤廣頤雙瞳方 雪鬢飄裾松柏蒼 吐辭面折貌莫當 大壑水上鐘鏗鏘 翁  
笑指腹萬怪威 胡牀踞坐氣龍虎 九州人物相爾汝 舌憶昔年補官處 漢河壯縣謠俗古 翁為  
匡畫良兒女 至今渠成歌召杜 眼底江南誰重輕 強預時議參臺評 咳唾不顧俗物驚 有如雲  
夜磕碎 晴雲勁翮副管城 一語不合杆上卿 拂衣歲月空崢嶸 翁亦提壺但自傾 酒樓向客縱  
緩橫 先公石文今有幾 祇翁健飯常倒屣 滿眼公卿可人否 軋念先公涕如雨 賤子瞻翁南斗

旁 元。精。照。燈。髭。戟。張。 大村豫章映雲日 椿氣溷渤溢汪洋 老逢世宴亦可傷 獨抱元覽哦義黃

萬事休置冰炭騰 隨翁行樂匡山陽 卷上、葉十六

は「高野過」(4192(20836))から得た句だ。錢基博『現代中国文学史』は王樹枏について、

樹枏の詩をつくるや雄恣怪瑰、また昌黎をもつて宗となす。しかして特に参うるに孟東野の凄苦、李昌谷の警蹙をもつてす。すなわち曾國藩の黄山谷によつてもつて昌黎を学ぶ者と、蹠運すこしく同じからず。 —三ニページ

という。あげるときりはないが、要するに、清朝の遺老たちの間では、李賀が相当愛好されていたようである。もちろん、李賀だけを特に愛したというのではない。かれらの知的嗜好はぜいたくで氣むづかしく高度だったので、その中に李賀も送られた、というわけだ。その点では同時の革命家たちも、かなりよく似ているような気がする。

民国にはいつてからの新しい文学運動の中での李賀流行のキ、かけは、あんがい清朝の遺老が準備したものかもしれぬ。

魯迅が少年のころ李賀を愛しへそして恐らく死ぬまでひそかに愛しながら人びとに対して、もはや李賀を愛しませず読みもせぬといつていたのは、新しい文学運動の中での李賀流行の輕薄さに対する反撥ととも、清朝の遺老たちのひけらかす李賀嗜好というスノビズムに対する嫌悪があつたのかもしれない。魯迅は外部のその輕薄とスノビズムを見つめることによつて、おのれの内部の、それらと同質の輕薄とスノビズムを撃とうとしたのだろうか。

清朝の遺老も、そのひとりひとりの生きかたやその芸術はさまざまである。かれらについての研究も出はじめたが、個々にこまかく見てゆく必要があるように思われる。

ついでにつけ加えておく。王樹枏の詩文集としては、

陶齋琴牘四卷文集七卷外篇一卷文集駢文一卷詩集八卷陶齋詩續集

陶齋詩所收

と『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』にするす。わたしはさきごろ『陶齋詩續集卷九卷十卷十一』二冊を手に入れた。『陶齋詩刻』の零本なのであろうが、前記目録にいう巻数と合わない。『中国書録』をみると「十卷」となっていて、これともあわない。どういふことなのだろうかと思つていたが、孫殿起『販書偶記』卷十八に、

陶齋詩集八卷續集十卷

光緒丁亥至民國丁巳刊

近刊本詩集十二卷・文集二十卷

とあるので、わたしの入手したのは「近刊本」の一部だと知つた。

▲雑記・60▼ 卷 明 召

1973.5.12.

『許公子簪姬歌』4215(20859)の第十七、十八句「長翻蜀紙卷明君、轉角含商破碧」の「ながりぐあい」が、どうもすっきりと胸におちつかなかったが、入矢義高書評「金岡照光著『敦煌の文學』」を読んで、なるほど、と膝をたいた。それをうつすまゝに旧注をならべておく。

長翻蜀紙。合作論。長幅也。石象王昭君曲序云。本爲昭君。以犯文帝諱。改爲明君。文帝司馬昭也。(吳正子)